

飯田市の原風景 新たな裏界線を市民とともに創るアートワーク

飯田市内には市街地を焼失した「飯田大火」（1947年）復興の際に、避難用通路として家と家の間に整備された裏界線という独特の風景がある。その裏界線と、周囲の谷、たんぼ、川やりんご並木が織りなす美しい風景を俳句のような風景と見立て、新築された文化ホールまわりの路地と広場に表現された。これはフセイン・ゴルバと市民との協働で創られた水辺とベンチ、小道が融合した空間である。

ワークショップでは参加者全員が大きな机を囲み、りんごの木を中心とした地域の過去と未来の風景を全員で描く「コミュニティーのテーブル」を実施。それにもとづき、アーティストと子どもたちは市内を流れる天竜川で石を集め、それぞれの願いや未来への期待を書き込み、その石を敷き詰めた床面舗装をおこなった。

地域の子どもたちが参加し地域資源である裏界線や川の景観を表現し、そのプロセスが市民の憩いの広場づくりと道づくりとなっている。文化ホールの両側の敷地や広場をたくさんの人びとが集える空間（コミュニティーのテーブル）とする新しい裏界線のカタチとなった。